

大学生における幼児期の記憶[†]

: 幼児期の記憶をいかす指導法に関する探索的研究として

山名 裕子*
秋田大学教育文化学部
井上 智義**
同志社大学社会学部

本研究では、大学生の幼児期についての記憶がどのようなものなのかを調べるとともに、一度きりの出来事と繰り返された出来事の記憶がどのように異なっているのかを検討した。4つの視点から構成された質問紙を大学生115名に行い、その記述から印象に残っている一度限りの出来事の記憶と、何度か繰り返した出来事の記憶が、どのように異なって記憶されているのかについて分析した。その結果、一度きりの出来事と繰り返された出来事の記憶の差異については、その出来事が起こったときの気持ちの鮮明度に関して、一度きりの出来事の記憶の方が、繰り返して起こった出来事より、鮮明に思い出せるという結果が得られた。一度きりの出来事についての具体的な記述からは、かなり感情的にネガティブな内容のものが数多くみられた。このことは、嫌な思いを強く味わったからこそ、そのときの出来事が鮮明に思い出される可能が示された。また、幼児期の遊びについては、繰り返し経験した出来事の記述の方が多く報告された。遊びは本来想起されやすい性質を備えていること、印象に残るようなある出来事が同時に生じたときに、一度きりの出来事として想起される可能性があることなど考察された。

キーワード: 幼児期, 自伝的記憶, エピソード, 鮮明度

問題と目的

人は自分が過去において、どのようなことを経験してきたかについてのある程度の記憶をもっている。その中には、非常に具体的に想起できるような鮮明な出来事の記憶もあれば、そう言われてみれば、そのようなことがあったかもしれないというような曖昧な出来事の記憶もある。そのいくつかの記憶は、

その後の人生にとって大きな意味をもつこともあれば、かりに社会的には重要な出来事であっても、その個人にとっては、それほど印象に残らない出来事も少なくない。

人が人生において経験した出来事の記憶は自伝的記憶 (autobiographical memories) と呼ばれている (佐藤・越智・下村, 2008)。そして、人が過去を振り返って想起できる記憶の中で、その個人的にとって意味のある記憶が、その後のその個人の人生に何らかの影響を与えていることには間違いがない。そのような個人にとって意味のある出来事は、ある日突然、何の前触れもなく事件のように起こることもあれば、毎日のルーティーンのように同じようなことが繰り返され、記憶に深く刻まれることもある。

そもそもこの自伝的記憶は、個人が経験した出来事の一つひとつのエピソードを、無秩序にまとめた

2010年2月18日受理

[†]How University Students Recall Their Personal Events from Early Childhood: Concerning Two Specific Episodes That They Experienced Only Once and That Repeated Several Times

*Yuko YAMANA: Akita University, Faculty of Education and Human Studies

**Tomoyoshi INOUE: Doshisha University, Department of Education and Culture

ような記憶ではない。たとえば、小学校の入学式や卒業式、高校の受験や大学の受験、それに就職や引っ越しなど、その個人にとっての人生の節目で生じた出来事などは、特別な意味をもって記憶される可能性が高い。また、大切な人との出会いや別れ、自分や身近な人の病気や事故、極度の緊張や不安を伴った経験なども、印象深い出来事として記憶に刻まれることが多い。

井上（1998）は、1920年代をハワイで生きた日系二世の英語によるオーラル・ヒストリーの資料から、彼らが受けた教育とその言語環境に関する質的分析をおこなった。それによると、高齢者の多くは、自分の人生を振り返る中で、人生の節目で起こった出来事を鮮明に想起しているようすがうかがえる。たとえば、その中には、日本語学校の校長が子どもたちに話した印象的だった説教の内容や、公立学校のアメリカ教師が自分に就職の世話をしてくれた話、マウイ島を離れてホノルルの高校に通うようになったきっかけなど、人生の節目と考えられる印象的な出来事についての記憶が、かなり具体的に語られている。

そのような一度きりの出来事が想起される一方、他方では、ある時期のようすが、当時のそのコミュニティや家族の習慣として、あるいは、その頃についての知識として語られることもある。そのような記憶として上述の研究では、自分の母親が日系人の子どもを預かる託児所を運営していた話、日本語学校で習った修身の話、公立学校の授業が終わってから日本語学校に歩いて行ったようすが、日本人会での天皇誕生日のお祝いの仕方などが語られている。それらは一度きりの経験というよりは、何度か（あるいは何度も）経験した出来事である。それらの記憶は別個のエピソードとして記憶されているのではなく、むしろ過去における知識として記憶の中に存在していると考えられる。同じような場面での繰り返しの出来事が構造化され、スクリプトが形成されると考えられる。ただ、それらの出来事が当時の自分との関係の中で想起され、ときには強い情動を伴って語られるところが自伝的記憶の特徴でもある。

ところで、自伝的記憶の研究においては、10代や20代に経験した出来事の記憶が他の年代での出来事と比べて、より鮮明に数多く想起されるという現象（*reminiscence bump*）が知られている（Janssen &

Murre, 2006；Janssen, Murre & Meeter, 2008）。このことは、人生にとっての大切な出来事が、この時期に多く生起することと関係があるようである。そして、それらの出来事はかなり強い感情を伴って経験されることになる。また、そのような出来事の中には、人生で初めて体験するような事柄も含まれている。さらに、その頃の思い出は、後になって回顧される可能性も高い。これらのようなことが、この時期の出来事の記憶が、他の時期に比べて数多く想起される現象の説明になっているようである（Janssen, et al., 2008）。このようなことから、この頃の出来事がその個人のアイデンティティの形成に重要な影響を与えていることは否定できない。

しかしながら、5年ごとの区分で想起される記憶を調べてみると、生後5年間の記憶は著しく少ない。このような現象は、幼児期健忘（*childhood amnesia*; *infantile amnesia*）という用語で示されることがある。とりわけ、3歳以前に経験した出来事の記憶は非常に乏しいことが知られている（佐藤ら, 2008）。おそらくその原因のひとつとしては、言語が未発達な段階での記憶は、言語的な符号化がなされることが少なく、長期記憶として定着しにくいことが考えられる。ところが、3歳頃になると、それなりにまわりの大人や同世代の子どもたちとも言語によるコミュニケーションもとれるようになり（村井, 2002）、3歳までの出来事の記憶と比べると、ある程度の記憶が想起できると考えられる。

過去における出来事を回想するようなタイプの記憶は、ある場所で、このような時に、このような人がいるときに、こういう状態で起こったというように、文脈をもった出来事として想起されるのが一般的である。ところが一方では、ある種のイメージだけが想起されるような断片的な記憶も存在する。人生における最初の記憶について調べた研究では、文脈をもった出来事のエピソード的な記憶が4歳頃の出来事から想起され始めることが多いのに対して、断片的な記憶は3歳過ぎから想起されることが示されている（Bruce, Phillips-Grant, Wilcox-O' Hearn, Robinson, & Francis, 2007）。そして、記憶の鮮明さや情動の強さについても、その断片的な記憶より、文脈のあるエピソード的な記憶の方がはっきりしていることが報告されている。

たとえば佐藤（2000）は、教員養成系大学の学生を対象に、小学校から高校までに自分が習った教師

にまつわる自伝的記憶についての調査を実施している。そして、教職志望の強い学生は、それが弱い学生に比べると、教師にまつわる不快な記憶が少ないことを見いだしている。さらに、教職志望の強い学生は、教師にまつわる想起された出来事から影響を受けたと認識している確率が高いことも示されている。このように、職業選択というアイデンティティの形成にも大きく関わる問題にとっても、過去の出来事の記憶が深く関与していることがうかがわれる。

この事実自体は非常に興味深いことではあるが、教職志望の学生が教員になってから、そのような過去の記憶がどのように関連するのかについては必ずしも明確に議論されていない。本来、私たちの経験は、仮にそれが良い経験でも好ましくない経験でも、その後の人生を生きていくうえで、よりよく活用できる可能性を秘めているものと考えられる。もしそうであるならば、たとえば、幼稚園の教師や保育士を志望する学生にとって、その教育や保育の対象となる子どもの時期の記憶について調査し、その内容を教育にいかす方法を探ることは意味があるように思われる。

すなわち、保育者を目指す学生にとって、幼児期の記憶が、保育者となったときの援助に関連すると仮定した場合に、その記憶を呼び起こした後で、子どもの立場に立って、過去の出来事を振り返るといった行為が、教員養成の方法論として意味をもつ可能性がある。

しかし佐藤（2000）では、それより以前の就学前に関する大学生の記憶については調べられていない。幼児期はその後の発達にとって重要であることが指摘されているが、幼児期での出来事や体験を、どのように記憶していて、そのことがどのような影響を与えるのかということについての研究は数多くない。本研究の目的は、大学生の幼児期についての記憶がどのようなものなのかを調べるとともに、一度きりの出来事と繰り返された出来事の記憶がどのように異なっているのかについても明らかにする。その違いの特徴を量的分析によって把握するために、先行研究（Anderson & Shimizu, 2007）で用いられているような各感覚モダリティに関するイメージの鮮明度などを評定法によって調査する手法も採用する。さらに、感情価の面からも、一度きりの出来事と繰り返された出来事の記憶のふたつのタイプ

の記憶の違いについて分析する。

そして、以下の4つの視点から質問紙を作成し、大学生が自分自身の幼児期をどのように位置づけているのかについて探索的に検討する。具体的には、大学生のもつ幼児期についての記憶には、①どのようなものがあるのか、②それをどの程度鮮明に覚えているのか、③エピソードの詳細についてどの程度の確信をもって想起されるのか、④そのエピソードを回想する機会はどの程度あるのか、という視点から調査する。さらに、印象に残っている一度限りの出来事の記憶と、何度か繰り返した出来事の記憶が、どのように異なって記憶されているのかについても分析する。また、本研究では、大学生のもつ幼児期における遊びに関する記憶には、印象に残っている一度限りの出来事の記憶と、何度か繰り返した出来事の記憶が、どのように量的に異なっているのかについてもあわせて検討する。

方 法

調査対象者 同志社大学の学部学生125名。ただし、分析に用いた有効回答は115名であった。

調査材料 B4版1枚に印刷された質問紙を準備した。質問紙の左半分には、幼児期に「繰り返し経験した事柄で、印象に残っている思い出」をひとつだけ具体的に自由に記述することを求める空欄（時期の選択肢を含む）を設けた。それぞれのエピソードに関して、5つの感覚（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚）ごとの記憶の鮮明度、全体的な記憶としての鮮明度、そのときの気持ちの全7項目についての鮮明度を、7段階評定で回答を求める項目を配列した。さらに、記述内容の4項目（場所、時間、年齢、そこにいた人物）についての確信度、その後のリハーサルの様子や頻度など5項目の合計9項目に対しても、同様に7段階評定の回答を求める項目を配列した。最後に、「今のあなたにとっての意味」を自由記述する空欄を設けた。さらに、質問紙の右半分には、「一回だけ経験したことがらで、印象に残っている思い出」とそれに関する質問を、同様の書式で配列した。

手続き 調査は集団形式で行われた。調査の所要時間はおよそ20分であった。

結果と考察

1. 記憶の鮮明度などに関する分析

115名の回答から得られたそれぞれ2つのエピソードに関して、その出来事の時期について分析をおこなった。その結果、繰り返し経験した出来事については、年少時のエピソードが24件、年中時が47件、年長時が52件、それぞれ報告された。また、一回だけ経験した記憶では、年少時16件、年中時45件、年長時52件が報告された。このように、先行研究同様、文脈のある出来事の想起は、年少児のものは数少なく、年長のものが比較的多く想起されることが確認された。

記憶の鮮明度等に関する平均評定値（図1）について、記憶の種類(2)×鮮明度に関する項目(7)の2要因分散分析をおこなった結果、交互作用がみられた($F_{(6,684)}=2.489, p<.05$)。単純主効果の検定の結果、項目「気持ち」における記憶の種類に有意な差がみられた($F_{(1,798)}=9.906, p<.01$)。これはその出来事があったときの気持ちの記憶の鮮明度において、一度きりの出来事と繰り返しの出来事の違いによるものであった。具体的には、図1に示すとおり、各感覚のモダリティに関する記憶の鮮明度については、平均値としては大きな差がみられなかったが、その出来事が起こったときの気持ちの鮮明度については、繰り返して起こった出来事についてより、一度きりの出来事の記憶の方が、鮮明に思い出せるという結果が得られた。

また、記憶の確信度に関する評定では、記憶の種類(2)×エピソードの項目(4)の2要因分散分析をおこなった結果、交互作用に有意差が認められ

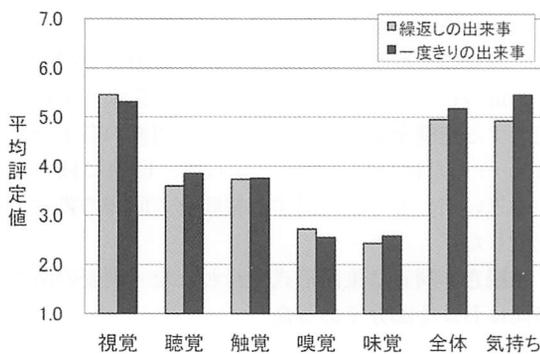


図1 記憶の鮮明度に関する平均評定値

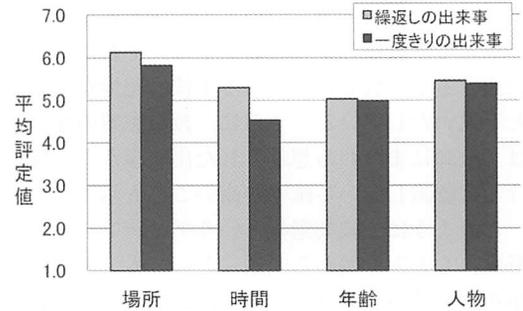


図2 記憶の確信度に関する平均評定値

($F_{(3,342)}=4.036, p<.01$)。単純主効果の検定の結果、図2に示すとおり、「一日の中の時間帯」の確信度で両者に有意な差が見られた($F_{(1,456)}=19.469, p<.01$)。すなわち、一度きりの出来事については、その想起された記憶から一日の中の時間帯を具体的に特定することが難しいのに対して、繰り返して経験した出来事の記憶については、時間帯を比較的特定できるということが示されたことを意味している。このことは、繰り返して経験したことの内容として、たとえば、幼稚園での遊びや、保育所への行き帰りなど、その内容から時間帯を推測したものが多かったためと考えることができる。

次に、リハーサル等に関する評定平均値（図3）について、記憶の種類(2)×回想の種類(5)の2要因分散分析をおこなった結果、交互作用がみられた($F_{(4,456)}=15.506, p<.01$)。単純主効果の検定の結果、「類似（よく似た出来事がたくさんあった）」の項目において、有意な差がみられた($F_{(1,570)}=51.962, p<.01$)。当然のことながら、繰り返して経験した出来事の記憶の方が、評定平均値が高かった。

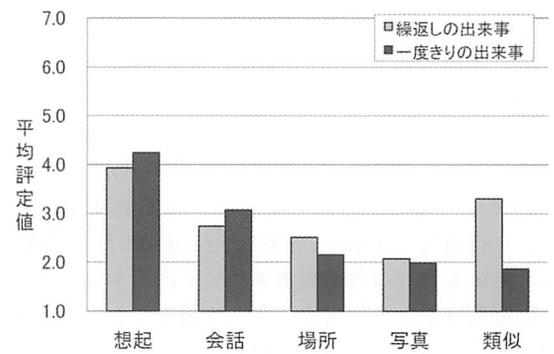


図3 リハーサル等に関する平均評定値

2. 一度きりの出来事と繰り返し経験したことの記憶の差異に関する分析

前述のとおり、一般的には、一度きりの出来事の記憶の方が、繰り返しの出来事の記憶より、そのエピソードに関する気持ちを鮮明に思い出すことができる。そこで、その傾向が相対的に強かった回答者から得られた両者のエピソードの例を表1に示す(ただし、ここで示されている〔 〕内の数値は、それぞれの感覚の鮮明度であり、数値が高いほど鮮明であることを示している)。

ここで得られている記述例は、いずれも一度きりの出来事の記憶が、繰り返しの出来事の記憶より、気持ちを鮮明に思い出すことができるとしたものであるが、回答者によっては少数ながら、逆のパターンを示すもの、いずれも、そのときの気持ちを鮮明に覚えている回答などもみられた。

本研究の調査から得られた115件の全体の回答(遊び以外の記述も全て含めたもの)の中で、感情価がポジティブな(愉快であったこと楽しかったことなどが報告されている)ものは、「繰り返し経験した出来事」の記述において41件、「一回だけ経験したことがら」の記述については、22件であった。また、逆に感情価がネガティブな(悲しかったことつらかったことなどが報告されている)ものは、「繰り返し経験した出来事」の記述において29件、「一回だけ経験したことがら」の記述については69件であった。すなわち、「繰り返し経験した出来事」の記憶には、感情価のレベルでは大きな違いが認められない($\chi^2=3.62$, $df=2$, $n.s.$)のに対して、「一回だけ経験したことがら」の記憶には、感情価がネガティブなものが多く、ポジティブなものが少ないなど偏りが大きいことが示された($\chi^2=36.9$, $df=2$,

表1 繰り返しの出来事と一度きりの出来事のエピソード例と記憶の鮮明度

	繰り返しの出来事	一度きりの出来事
回答者A	保育園で友達と泥だんごをすごく真剣に作っていた。誰が一番固くキレイに作れるか競っていた。 〔視覚:3, 聴覚:1, 触覚:5, 嗅覚:3, 味覚:1, 全体的:6, 気持ち:1〕	歯医者に連れていかれた時、嫌がって暴れすぎて治療台に綱でおさえつけられた。治療後「もう来ないください」と言われた。 〔視覚:6, 聴覚:3, 触覚:1, 嗅覚:4, 味覚:4, 全体的:4, 気持ち:6〕
回答者B	同じ社宅に住んでいた幼なじみの女の子と近くの公園「おならび公園」でおままごとをした。 〔視覚:6, 聴覚:5, 触覚:3, 嗅覚:2, 味覚:4, 全体的:5, 気持ち:3〕	同じ社宅に住んでいた仲良しの友達と社宅の中で、小さい子が乗る車(?)に乗って遊んでいたら、階段から落ちた。でも怪我することもなく無事に着陸した!! 〔視覚:7, 聴覚:5, 触覚:6, 嗅覚:4, 味覚:4, 全体的:6, 気持ち:7〕
回答者C	お昼のお遊戯の時間するとき、よく保育園の遊具で友達と遊んだり、走り回ったりしていた。 〔視覚:5, 聴覚:2, 触覚:2, 嗅覚:1, 味覚:1, 全体的:3, 気持ち:3〕	まだおもらしが治らなくて、保育園のお泊り会するとき、寝ないよう一日中起きていた。 〔視覚:6, 聴覚:4, 触覚:3, 嗅覚:3, 味覚:1, 全体的:6, 気持ち:7〕
回答者D	年少の頃はいつも兄に手を引っ張られながら、保育園の中に入っていたみたい。 〔視覚:2, 聴覚:2, 触覚:3, 嗅覚:3, 味覚:3, 全体的:2, 気持ち:2〕	親に保育園まで送ってもらったが、その日は兄(年長)がいなくて1kmぐらいの距離を歩いて帰って来た。親に送ってもらって、すぐ歩いて帰って来て、家の前ですわっていた。 〔視覚:6, 聴覚:5, 触覚:6, 嗅覚:4, 味覚:4, 全体的:6, 気持ち:6〕
回答者E	公園のかべに向けてテニスボールを投げている。 〔視覚:6, 聴覚:2, 触覚:6, 嗅覚:3, 味覚:4, 全体的:5, 気持ち:2〕	親の車のドアを思い切りあけて、壁にぶつけて怒られた。 〔視覚:5, 聴覚:1, 触覚:5, 嗅覚:4, 味覚:4, 全体的:5, 気持ち:6〕

注:〔 〕内は記憶の鮮明度に関する各項目の評定値を示している。得点範囲は1点から7点であり、得点が高いほど、鮮明に覚えていることになる。

表2 反復的な遊びと一度きりの印象に残っている遊びの具体例

反復的な遊びの具体例	一度きりの印象に残っている遊びの具体例
① 車が好きて、よくミニカーやチョロQを走らせて、家の中や外で遊んでいた。	① 同じ社宅に住んでいた仲良しの友だちと社宅の中で、小さな子が乗る車(?)に乗って遊んでいたら階段から落ちた。でも怪我することなく無事に着陸した!!
② 保育園で友だちと泥だんごをすごく真剣に作っていた。誰が一番固くキレイに作れるかを競っていた。	② 滑り台で友だちと遊んでいて天辺から飛び降りて着地に失敗し、意識がとんだ。
③ 同じ社宅に住んでいた幼なじみの女の子と、近くの公園「おならび公園」でおままごとをした。	③ 幼稚園でブランコはとても人気で、順番待ちしている子が多い中、ブランコに乗っていた子が頭から落ち、それを眺めていたこと。
④ お昼のお遊戯の時間するとき、よく保育園の遊具で友だちと遊んだり、走り回ったりしていた。	④ 幼稚園の遊具で遊んでいる途中で落ちて大ケガをしたことがある。
⑤ 幼稚園からの帰り道に毎日のように知り合いのおばさんが経営しているお店に寄って、話しをしたり奥の部屋でゲームをさせてもらっていた。行くと必ずりんごジュースをくれていたのを覚えている。	
⑥ 幼稚園の砂場に穴を掘って水をためて、そのなかに入って泥遊びをしていたこと。家に帰る前くらいの時間。だから泥まみれで家に帰った。	
⑦ 昼休みに男の子に混じって、高い鉄棒に登り、ぐるぐる回っていた。	

$p<.01$).

なぜ一度きりの出来事について、そのときの気持ち鮮明に思い出されるのであろうか。表1のエピソードからは、一度きりの出来事については、かなり感情的にネガティブな出来事についての記述がみられる。逆にいえば、可能性としては、嫌な思いを強く味わったからこそ、そのときの出来事が鮮明に思い出されるのかもしれない。それに対して、繰り返しの出来事については、普段よくやっていた遊びや、その頃の習慣的な行為の記述が読み取れる。かりに一回一回の出来事については、それぞれでさまざまな感情が伴っていたかもしれないが、それをまとめて思い出すような場合には、その感情価が平均化されてニュートラルなものになった可能性は十分に考えられる。

3. 遊びに関する記憶の分析

最後に、115名の回答から得られたそれぞれ2つのエピソードに関して、その内容が明らかに遊びであるもののみを合計抽出した。その結果、そのような遊びに関する記憶は、「繰り返し経験した出来事」の記述において40件、「一回だけ経験したことがら」の記述においては17件が確認された。このことから、幼児期の遊びに関する記憶は、何度か繰り返した遊

びがより多く記憶に残っているということができよう。同じことを繰り返すことは、本来、遊びの大きなひとつの特徴といえる。表2に、その具体例を記述する。

表2の記述内容からは、一度きりの印象に残っている遊びでは、事故やそれに伴うけがなどに言及しているものがみられる。遊びは本来、同じようなことが繰り返しおこなわれることが多く、「このような遊びをよくしていた」という表現での出来事の記憶の記述例が数多くみられる。すなわち、繰り返して経験した出来事の記憶として、遊びは本来想起されやすい性質を備えているのであるが、たまたま、ある時、印象に残るようなある出来事が同時に生じたときに、一度きりの出来事として想起される可能性が否定できない。そういう意味では、一度きりの出来事の記憶の想起の多くは、構造化された自伝的記憶のひとつの事例と考えることができよう。

おわりに

本研究では、大学生の幼児期についての記憶がどのようなものなのかを質問紙調査法により検討した。とりわけ、一度きりの出来事と繰り返された出来事の記憶の差異については、その出来事が起こっ

たときの気持ちの鮮明度に関して、一度きりの出来事の記憶の方が、繰り返して起こった出来事より、鮮明に思い出せるという結果が得られた。一度きりの出来事についての具体的な記述からは、かなり感情的にネガティブな内容のものが数多く読み取れた。このことは、嫌な思いを強く味わったからこそ、そのときの出来事が鮮明に思い出される可能を示唆するものであると思われる。また、幼児期の遊びについては、繰り返し経験した出来事の記述においてより多く報告された。遊びは本来想起されやすい性質を備えているのであること、印象に残るようなある出来事が同時に生じたときに、一度きりの出来事として想起される可能性があることなど考察された。

山名(2007)では、大学生に対して自分自身が幼児だったころにどのような遊びをしていて、その中で学んだと思うことはどのようなことであったのか、という調査をおこなった。その際にも論じたが、大学生が自分の記憶をたどり、どのような生活を送り、どのような遊びをしてきたか、を考えることにより、幼児と接するときに姿勢や構えのようなものが変化するかもしれない。すなわち、大人の視点ではなく、子どもの発達を捉えるような関わり方を促すことができるのではないだろうか。言い換えれば、幼児期の記憶を呼び起こした後で、子どもの立場に立って、過去の出来事を振り返るという行為が、教員養成の方法論として大きな意味を持つ可能性がある。

山名・井上(2009)では、保育者を目指している学生に対して、幼児期の出来事の中で、一番印象に残っている場面として、ポジティブな思い出とネガティブな思い出を書いてもらい、その場面の分析と、またその場面での保育者の援助がどのように違うのかについて検討した。これは保育者を目指す学生にとって、幼児期の記憶が、保育者となったときの援助に関連するかどうかを検討する探索的な調査として行われた。その結果、ポジティブな場面よりもネガティブな場面での保育者の存在や保育者の一見適切でないと思われる援助を受けたことを記憶している学生が多く見られた。

本研究でも一度きりの出来事として、ネガティブな出来事を記憶していることが示されたが、その場面が、たとえば保育の場面であるならば、そこでの保育者の関わり方はとても重要である。そしてその

関わり方は、いわゆる保育技術、とよばれるようなものではなく、子どもとの関係の中で培われている共感的な理解や信頼関係が必要になってくるだろう。

そしてそのことを、大人として子どもにかかわる際の援助としてどのようにいかすことができるのか、さらに詳細に研究をすることによって、保育者の資質や発達のとらえ方を、大学生自身がいかすことができるようなカリキュラムや授業を考えることができるのではないだろうか。

大人は必ず幼児期を体験してきているのであるが、年月が経過すると、なかなか子どもの視点でものごとを考えるということが難しくなる。子どもの立場に配慮した保育ができるための一助になるのなら、このような自己の幼児期の記憶を振り返り、その時の気持ちをいま一度、意識化する行為には、大きな意味があるように思える。

引用文献

- Anderson, D. & Shimizu, H. (2007). Factors shaping vividness of episodes: Visitors' long-term memories of the 1970 Japan World Exposition. *Memory*, **15**, 177-191.
- Bruce, D., Phillips-Grant, K., Wilcox-O'Hearn, L.A., Robinson, J.A., & Francis, L. (2006). Memory fragments as components of autobiographical knowledge. *Applied Cognitive Psychology*, **21**, 307-324.
- 井上智義(1998). マウイの日系二世の教育と言語環境：オーラル・ヒストリーの分析を元にした心理学的アプローチ。沖田行司(編) ハワイ日系社会の文化変容, ナカニシヤ出版, pp.127-155.
- Janssen, S.M. & Murre, J.M.J. (2006). Memory for time: How people date events. *Memory & Cognition*, **34**, 138-147.
- Janssen, S.M., Murre, J.M.J., & Meeter, M. (2008). Reminiscence bump in memory for public events. *The European Journal of Cognitive Psychology*, **20**, 738-764.
- 村井潤一(2002). 乳幼児の言語・行動発達 風間書房
- 佐藤浩一(2000). 思い出の教師：自伝的記憶の機能分析. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **49**, 357-378.

- 佐藤浩一・越智啓太・下村裕美 (2008). 自伝的記憶の心理学 北大路書房
- 山名裕子 (2007). 大学生が考える「遊びの中の学び」 秋田大学教養基礎教育研究年報, **9**, 23-29.
- 山名裕子・井上智義 (2009). 幼児期の記憶をいかに指導法に関する探索的研究(2)－エピソード場面と保育者の存在の関連から－ 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, p.638.

Summary

This study aims to investigate how university students recall their personal events that happened when they were preschoolers. A total of 115 students responded the questionnaire that required them to describe two specific episodes that they experienced only once and that repeated several times respectively. The results showed that the difference between the two types of

memory was that the events that occurred only once were recollected more vividly, especially concerning the emotion they felt. Many of those personal events turned out that they involved negative emotions, which indicated that events that emotionally experienced could be recalled vividly. Furthermore, personal events concerning their play in childhood were more frequently reported when they described their events that occurred repeatedly. It was suggested that only a personal event that involved both play activity and impressive event might be recollected as an event that they experienced only once.

Key Words : early childhood, autobiographical memories, episodes, vividness

(Received February 18, 2010)